

【出席率】 会員57名中46名

【先々週の出席率】 90. 74%

【ビジター】

三条RCより 五十嵐晋三君

【先週のメイクアップ】

3/23 地区拡大委員会へ

馬場信彦君 葦澤喜一郎君 鈴木 武君
長谷川晴生君 吉井正孝君 鈴木圀彦君
佐藤嘉男君

3/25 三条RC

石山荘一君 野島廣一郎君
若井 博君 渡邊久晃君

3/26 燕RCへ

飯山勝義君

3/28 ロータリーの友セミナーへ

馬場信彦君 馬場一敏君 鈴木 武君

3/28 一年交換学生オリエンテーション(新潟)へ

安達 裕君

3/28 ガバナー連絡会へ

馬場信彦君 葦澤喜一郎君 鈴木 武君



国際ロータリー会長 李 東 建 [韓 国]
第2560地区ガバナー 馬 場 信 彦 [三 条 南]
第4分区AG 古 井 辰 禧 [吉 田]
会 長 吉 井 正 孝
幹 事 鈴 木 圀 彦
S A A 野 中 悟

事務局

〒955-8666 三条市旭町2-5-10

三条信用金庫本店内

☎0256-35-3477 Fax 0256-32-7095

E-maile info@sanjo-minami.jp

URL <http://www.sanjo-minami.jp>



会長挨拶

吉井 正孝 会長



こんにちは。ご挨拶を申し上げます。

今日は三条RCから五十嵐晋三さん、ようこそおいで下さいました。どうぞ最後までごゆっくりお過ご

して下さい。

さて今日は嬉しいニュースが二つ程ございます。その一つ目は会員の齋藤嘉一さんが、難しい頭の手術を無事終えられて、今日から会の活動に復帰されました。おめでとうございます。そして今一つ。増強委員長の若井さん、そして長谷川晴生さんをお願いしておりました新会員の入会が決定し、来週から出席頂くことになりました。新入会員は、島田の馬場工業所 社長の馬場輝仁さんです。こちらの話題も大変有難いお話しです。

ところで今日は、フランスはパリのエッフェル塔が完成した日だそうです。

1889年(明治22年)の出来事。この年の5月から開かれる万国博覧会に向けて、フランス人技師エッフェルが設計した高さ312メートルのこの塔が完成しました。この塔の出現には、フランス中で賛否両論の「景観論議」が巻き起こったと伝えられております。

今日は久しぶりに佐渡で自然放鳥された「トキ・その後」の話題に触れようと思います。

昨日の読売新聞に書いてあった記事によりますと、昨年9月自然に放たれたトキ10羽の内、一羽は行方不明、一羽は死に、残るは8羽・・・。その内4羽のメスが海を渡り佐渡以外の本州で生活を始めています。佐渡に残る4羽はいずれも「雄トキ」。現状でのペアリングは不可能となってしまいました。トキの面倒を看ている獣医師の金子さん(三条市出身)によると、トキは基本的に「メスがオスを選んで」ペアリングの相手を探す・・・との事。この論で行くと、放鳥された5羽の雄トキは、雌トキの「メガネに叶わなかった」と言う事になります。

これらの点を考慮して、今年其自然放鳥は、「雌トキを少し多目に放ったら」との専門家の意見もあるとか・・・。そう言えば環境省から佐渡へ派遣された岩浅自然保護官のボヤキ話を思い出します。彼は入省間もない若い技官。たまたま「鳥類に詳しい」というだけの理由から佐渡に派遣されました。しかも彼はその頃、結婚間もない「単身赴任」。トキの餌場を確保したり、島民にトキ保護の重要性を訴え、協力を仰いだり東奔西走の毎日。そして迎えた今年がこのありさま・・・！トキよ、お前たちは一体何を考えているんだ・・・？と、聞きたいところでしょう。

いやはや、人間もトキの世界も大変だァ・・・と、同情しながら、本日の会長挨拶を終わります。

幹事報告

鈴木 圀彦 幹事

●三条ロータリークラブより「記念講演会」のお知らせ

日時 4月18日(土) 13:30~15:00 (13:00開場)
 会場 ハミングプラザVIP グランドホール
 講師 北京オリンピックバレーボール男子監督 植田辰哉氏
 『結果はプロセスにより決まり、プロセスは結果により評価される』
 入場無料 整理券が必要 三条RC事務局へ

ニコニコボックス

～・ 3月30日 19,000円 今年度累計 802,894円 ・～

- 吉井君** さあ、いよいよ春です。春は桜の花見です。4月12日(日)の岩室での旬例会、会員の多数のご出席をお願いします。坪井先生、本日の卓話 よろしくお願ひ致します。
- 鈴木(圀)君** 本日の卓話 坪井先生 よろしくお願ひ致します。
- 坪井君** WBC日本二連覇おみごと！全員で勝ちとったものです。おめでとう！景気もこのように上昇してくればよいのですが・・・。本日は下手な卓話をやります。
- 馬場(信)君** 齋藤嘉一さん、ご退院おめでとうございました。地区ガバナー月信の方も今後よろしくお願ひします。後3ヶ月です。
- 星野君** 齋藤さんの復帰を祝って！！
- 渡邊(久)君** 久しぶりの例会出席です。
- 丸山(徹)君、野中君、西巻君、銅冶君、佐藤(嘉)君、田代君、木原君、相田君**
 坪井先生、卓話ご苦労さまです。楽しみにしております。
- 安達君** 都合で早退させていただきます。坪井先生、大変申し訳ございません。
- 田中(悌)君、石山君、荒澤君**
 BOXに協力致します。
- 熊倉君** BOX、ご協力有難うございました。
 月岡保育所の子育て支援センターが完成しました。

4月のお祝い

会 員 誕 生

2日 佐藤栄祐君	5日 嘉瀬 修君	11日 野水孝男君
14日 安達 裕君	17日 大久保秀男君	20日 若井 博君

夫 人 誕 生

8日 野崎裕子(正明)さん	14日 渡邊ノブ子(久晃)さん	22日 大久保昭子(秀男)さん
24日 馬場美恵子(眞樹)さん	30日 馬場静子(一敏)さん	

結 婚 記 念

5日 坂本洋司君・満寿子さん	9日 鈴木圀彦君・朝子さん	10日 渡邊久晃君・ノブ子さん
15日 大久保秀男君・昭子さん	17日 丸山徹夫君・光子さん	25日 永桶俊一君・京子さん
26日 木原崇君・洋子さん	26日 野島廣一郎・優子さん	29日 松崎孝史君・恵さん

* * おめでとうございます * *



「私の尊敬する人物」

坪井 正康 会員



アルバート シュバイツァー (1875~1965)

シュバイツァーと言えばその名を知らない人はいないと思いますが、名前のわりにはその偉大さを知っている人は多くないと思います。私は、シュバイツァーは 20 世紀最大の偉人の一人だと思っています。

シュバイツァーは 1875 (明治 7) 年、アルザス地方の一牧師の子として生まれました。哲学博士にして神学博士、シュトラスブルグ大学神学部講師であり、かつ世界に名の知られたオルガ

ン奏者、そしてバッハ研究の世界的権威者、そしてオルガン製作者の第一人者、これがシュバイツァー 30 歳の時点での肩書きであります。

後にこれに医学博士という肩書きが付くことになるわけですが、一人の人間でよくもこれほどのことが出来たものと感心させられます。私などどれ一つとっても真似も出来ません。

シュバイツァーは特に音楽的才能に優れ、もし仮に彼が一つの職業しか許されないとしたら、間違いなく音楽家の道に行っただであろうと言われていました。

しかし、シュバイツァーの凡人の及ばない所はそのままではいなかったことであります。21 歳の時、彼は天からの啓示を得たというのです。そして、「自分は 30 歳になるまでは学問と芸術のために生き、それから後は、直接、人間への奉仕に一身を捧げよう」という崇高な目的を立てたのです。目標を立てるだけでなく、本当に実行してしまう所が偉いのであります。

30 歳の誕生日近くのある日、ある宣教師教会のパンフレットを読んで、アフリカのコンゴ地方の悲惨な状況とそれを救うための人間が不足していることを知ったのです。ここで彼は人間に奉仕するため、医師としてアフリカへ行くことを決意します。医師になり、病人ために尽くそうと計画を立て、医学の勉強を開始します。これを知った両親、知人は正気を失ったのではないか、狂ったのではないか、何故前途洋々たる人生を捨てるのかと反対や非難が殺到したそうです。当然だと思っています。

しかし、彼は決行します。医学部に一年生として入学、8 年間医学の勉強を続けました。その間、医学の勉強の他、神学の講義も続け、日曜日はミサの説教を行い、オルガンの演奏会も行っているのです。オルガン製作のための仕事も続行し、遠くまで古いオルガンを調べに行くこともありました。常人とはとても思えません。他にアフリカに行くための資金集めという仕事もありました。

1913 年 3 月、38 歳になったシュバイツァーはアフリカに出発しました。1 年前に結婚しましたが、その奥さんも彼に賛同し、看護婦の資格を取っておりました。シュバイツァーが目差した所はランパネレという所です。当時はフランスの植民地、現在はガボン共和国です。赤道直下大西洋に面する国で、ランパネレは海岸河口から 200 キロ奥に入った所でした。ここで新生活をスタートとすることになるわけですが、着任して驚いたことに、ランパネレで用意されていたのは、夫妻の住居と病院の敷地のみであって、あとは全て独力で造り上げなければならなかったのです。

まだ荷ほどきも終わらないうちに患者がやって来てきて、まずは小さな診察室と手術室を自力で造って活動開始。まもなく増築をしていかなければいけません。当時のアフリカでの建設工事というのは大変で、肝心の人手が足りない、集っても働こうとしない、おそらくシュバイツァーもアフリカで大工をするとは考えてもいなかったと思います。それでも「やめた」とは言わない。自ら建設資材を集め、材木をひき、土台も造ったのです。設計は勿論、病人のベッドも造ったのです。彼は、状況に応じて必要な能力を身につけ何でもこなしてしまうという驚くべきマルチ才能を持った人物だったのです。学者、芸術家、医者その他、設計家、大工という能力を備えた人物だったのです。ともかくも診療所が完成して仕事も順調に進み始めた頃、第一次世界大戦が勃発し、彼の事業は頓挫します。

彼はドイツ国籍でしたので、フランス植民地では敵国です。フランス軍の捕虜となり、1917 年フランスの捕虜収容所へ送られ、最初のアフリカ滞在はわずか 4 年あまりで終わりました。しかし、シュバイツァーはこれであきらめたわけではありません。1924 年、再びランパネレに向かいました。その時、49 歳

でした。7年ぶりに再び医者兼大工という生活を始めたのです。

この頃になるとシュバイツァーの偉大さが世界中に知れわたり、だんだん医師や看護婦の助手が増え、病院の運営を援助する団体もヨーロッパやアメリカに出来てきました。日本からもシュバイツァーに魅せられ、一緒に仕事をした医師が2名おります。

しかし、如何なシュバイツァーといえども頭に来たことも度々だったようです。それはアフリカ人に対してです。アフリカ人は自分の鍋で煮た物しか食わず、何度注意してもベッドの下で火を使う、手術する医者をあれは手術して食べてしまう食人鬼だと騒いだり、他の種族の者が苦しんでいるのを見ても担架で運ぶ手伝いもせず、病院の蚊帳や道具を持って夜逃げしたりする人も多く、もう絶望感に打ちのめされたことも多々あったそうですが、当然だと思えます。

何故、シュバイツァーはこうまでして未開のアフリカで奉仕活動をやれたのでしょうか。それは、彼は大変な奉仕活動の中で「生命への畏敬」という悟りに至ったからであります。生きとし生けるものに対する尊敬の念、そして、生きとし生けるものに愛を捧げるといふ哲学に目覚めたからです。こういったしっかりした理念がなければ続けられるものではありません。1952年、彼はノーベル平和賞を受賞しました。1965（昭和40）年、90歳、ガボンで亡くなりました。昭和40年ですからつい最近まで生きていた人です。

彼の生涯は「理想に燃えて他人に奉仕するところにこそ人間の幸せがある」と語っていると思えます。まさに私共医師ばかりでなく、我々ロータリーの真髓を生きた人ではないかと思えます。

ウィリアム・オスラー（1849~1917）

この人は、「病気をみずして病人をみよ」「患者に耳を傾けよ」などの言葉で有名な臨床家の鑑みたいなの約百年前の人物です。

カナダで生まれ、米国、英国などで教授として教鞭をとりました。根っからの教育者で、オスラーは学生に患者を生きた人間として取り扱うことの重要性を説き、医の倫理や患者への良きマナーを身に付けることを繰り返し教えました。

彼は教科書より患者から直接学ぶべきことが多いこと、決して本の奴隷にならないようにとも教えたのです。臨床を学ぶには先ず患者をみるのが優先すると述べ、それまでのドイツ的教育に代わって新しいベッドサイドテーチングを初めて実践したのです。それまでは講義中心の教育でした。「我々がここにあるのは自分のためではなく他の人々の人生をより幸せにする為にある。医療とは手仕事でなく、技術（アート）である。商売でなく、天職である。」と教えました。私はオスラーの講演集を読んで博士を知り尊敬しています。時間がなく詳しく述べる事が出来ませんが、臨床家、看護婦、学生などの心構えといったものを一生懸命説いた人です。このようなオスラーに心酔した人々が著名な医学者も、私のような無名な者も同等の席に会し、彼に関する話を聞き、医療とは何か、医師とは何かといったことを考える会があります。一年に一回開かれます。「日本オスラー会」といって、例の日野原先生が会長です。世界の各地にもあります。

フローレンス・ナイチンゲール（1820 江戸時代~1910 明治 42 年）

この名前も知らない人はいないと思えます。看護婦の神様のような人です。「クリミアの天使」にして看護婦という職業の確立者が一般の人に知られている肩書きです。如何にしてこのようなことになったのか・・・。

彼女は、ロンドン上流社会の娘として生まれました。彼女は別に職業を身に付けることは一切必要なく、結婚と子育て、社交界で活躍、年に2回は田舎の別邸や別荘で暮らしていればよいそんな環境にあったのです。

ところが、彼女が17歳の時、「1837年2月7日、神は私に語りかけられ、神に仕えよと命じられた」という天の啓示を受けたのです。思い出されるのが百年戦争でフランス軍を救ったジャンヌダルクです。ともに神の声を聞き、戦場の英雄になりましたが、一方は19歳か20歳で魔女として処刑、他方は90歳まで長生きして栄光の生涯を送りました。

恵まれた環境で退屈な生活に飽き飽きしていたナイチンゲールは何か女性で社会に役立つことをしたいという考えを持っていました。先ず思いつくのが慈善事業でした。そして病める人の看護をするという気持ちに目覚めます。もはや看護婦業を天職として認めていくのです。彼女の生涯はいわば長い障害物レースの様なもので、何かしようとするすると障害物が現れました。最初の障害物が両親でした。当時看護婦の職業は恥ずべき仕事とされていたのです。身分の低い、薄汚い人がやっつけ仕事で看護したのです。

ナイチンゲールの最大の業績は当時の上流階級の人々が口に出すのも恥ずかしいと言われていた看護婦のイメージを一変させてことにあります。ナイチンゲール以前には現在のように知識と訓練と職業意識をもった人などいなかったのです。

また、当時の病院もひどい所だったようです。ナイチンゲールの覚書に「病院が備えているべき第一条件は病院が病人に害を与えないこと」と書いています。つまり、病院に入るとかえって病気が悪くなるという状態だったということです。その頃のロンドンの病院は堕落と不潔の巢窟であり、初めて病院に入ったら間違いなく吐き気を催したと言われていました。1829年にロンドンに初めて警察が出来ましたが、その主な仕事の一つは病院内の患者の殺し合いを止めることだったと言いますが、推して知るべくです。一種の貧民収容所であったのです。富裕な両親が反対するのは当然でありました。

その後も幾多の反対、抵抗にあいながらも勉強して33歳でとうとうロンドンの病院の看護婦の監督として働くことが出来ました。「天の声」を聞いて16年目のことでした。

天職を得てナイチンゲールはロマンチストからリアリストへと変身します。

ナイチンゲールがロンドン病院の勤務を始めた翌年、クリミア戦争が勃発、ナイチンゲールは38人の看護婦を連れて陸軍病院に赴いたのです。その病院は名ばかりで、以前兵舎として使っていた建物に病人を収容しているだけで、2500人の収容能力に調理場は一つしかなく、鍋が13個あるだけの道具だったということです。ぎっしり詰め込まれたベッドの間や通路には何日間も便器が放置され、ロンドンのスラム街よりもひどい衛生状態であったという病院です。イギリスにとってクリミア戦争はロシアとの戦いというよりも病気の闘いであったと言います。戦死者一人に、病院でなくなる病死者は7倍あったそうです。クリミアに来てナイチンゲールがしたことは、看病はさることながら陸軍の役人との病人対策交渉、病院を清潔にすることなどに力を注ぎました。幸い彼女はお金持ちでしたので、洗濯のためのボイラーを設置したり、衛生設備を改良したり、病室の清掃を行ったり、コックを雇い病人にふさわしい食事を作らせたりしたのです。患者の死亡率は半分になりました。

仕事中にいろいろな抵抗があったりしましたが、彼女の「クリミアの天使」の伝説を広めたのは病死を免れて故国に帰還した兵士たちでした。ある兵士が手紙に書いています。

「あの方が通り過ぎる姿を目にしただけでどんなに慰めになったことか。大勢いる病人だから直接微笑みをかけられる人も全員ではなかったが、通り過ぎて行く彼女の影に接吻し、それから満足して眠りについたのだった。」

暗い廊下、病室をランプを持って通って行く姿に後ろから拝んでいる、それ位患者に愛されたわけです。現在でも看護学校の儀式にローソクを持って頭にナースキャップをかけてもらう儀式がありますが、これはナイチンゲールをイメージしたものであります。

ナイチンゲールが来てから病院は喧嘩の激しい所から教会の様に清らかな場所になったと言われていました。彼女はクリミア戦争ではわずか2年しかおらず、彼女の大きな仕事はロンドンに帰ってからのにあります。陸軍医務局を始め多くの行政と交渉し、病院の改善を訴えます。ロンドンの社交界にいたことなどが有利に働き、最後には政界の黒幕に上り詰め、あらゆる医療問題を改革し、看護婦の地位も今のようなところまで上げたのです。彼女は、人間愛を十分に持ち合わせた上、素晴らしい政治的、事務的能力ももった人なのでした。この様な激務をこなしながらも90歳の長寿を全うしました。

他にも尊敬する医療界の人物として緒方洪庵等おりますが、時間の関係でこの辺にさせていただきます。今日お話ししました偉人たちに共通することは、作家の木原武一という人の言葉ですが、「偉人の第一条件は人のために奉仕するという献身的行動である。我欲を捨て、他人のために尽くすことを無上の喜びと感ずるところに偉人の共通点がある。このような献身的行動のもとにあるのは各人特有の理想である。理想を持たない偉人はない。」と書いています。

私たちがロータリーに入って、人のため、奉仕の精神をかかえています、その上しっかりと志をもって生きてゆければ立派な人生を送れるのではないのでしょうか。



月信

国際ロータリー第2560地区

ROTARY INTERNATIONAL DISTRICT 2560

2008-2009年度 3月号 Vol.9



2008-09年度 第2560地区クラブ紹介

夢に向かって元気に活動！！

私たちのクラブは設立から約8年、皆さまのご指導と会員一人ひとりのパワーにより、活力ある素晴らしいクラブに成長することができたと思います。

特に、魅力溢れる11名の女性パワーは絶大、明るく楽しいクラブ運営の根幹です。中越沖地震で頂いた暖かい励ましやお見舞いに感謝の気持ちで一杯となり、私たち自身が元気であり私たちのクラブが元気であり続けることが「復興」につながるものと信じ、夢に向かって活動しています。



柏崎中央 RC
土田 智明 会長

米山奨学委員会 寄付増進担当 星野 健司 (三条南 RC)

第2回米山奨学委員長セミナーを終えて

2月14日(土)正午より三条ロイヤルホテルにて開催され、各クラブの本年度委員長と次年度委員長の出席のもと地区役委員を含め89名の参加をいただきました。各分区より代表の7名の米山奨学委員長より活動報告をしていただいた後、各分区別のグループディスカッションでは、米山奨学の寄付金について各クラブの現況を報告していただきながら、年度目標額の寄付金の集め方について真剣な討議がなされました。

その後、体験報告としてカウンセラーの吉井正孝(三条南 RC)様、米山奨学生のタキ・コフィ・アルフォンソ(コートジボワール)様より貴重なお話をお聞きし、今回のセミナーを通して「米山奨学会」の意義を再確認できる有意義な機会になりましたことを、ご報告いたします。



分區別討論の様子



タキ・コフィ・アルフォンソ米山奨学生

四つのテスト

一言行はこれに照らしてから

I 真実か どうか

III 好意と友情を深めるか

II みんなに公平か

IV みんなのためになるか どうか